

〈書評〉

永守伸年著

## 『カント未成熟な人間のための思想——想像力の哲学』

(慶應義塾大学出版会、2019年)

浜野 喬士

本書は、著者が京都大学大学院文学研究科に提出した博士学位請求論文に修正、加筆をしたものである。本書は *Einbildungskraft* の訳語として「構想力」ではなく、「想像力」を採用するわけだが、それは「[…][『純粹理性批判』において主張される *Einbildungskraft* の「総合」の作用には現象世界を構成する、あるいは構造化する機能が含まれて[…]]」いるが、しかし「[…]本書は「総合」が問われる認識の局面だけでなく、実践哲学における行為の実践、あるいは美学における感情の伝達といった批判哲学のはるかに広範な射程から *Einbildungskraft* の全体像を捉えなおそうとするもの」(「序論」)であるから、とされる。

序論および結論によると、本書は二つの目的を持つ。第一に「啓蒙の循環」と呼ばれる問題を指摘し、この問題への応答をカントから抽出することである。そして第二にカントの批判哲学における「想像力」の全体像を示すことである。両目的は「不可分に結びついており」(「結論」)、「想像力という能力を考察することなくカントの啓蒙思想を解釈することも、啓蒙の思想と関係を結ぶことなく想像力の理論を理解することもできない」(「同」)とされる。また筆者によれば、これら両目的は、「[…] 後者の「想像力」の問題をカントの理論哲学、実践哲学、そして『判断力批判』の構想にしたがって考えることによって前者の「啓蒙の循環」の問題の解決」が図られる、という関係になっているという(「結論」)。

ここから本書の読者は、本書の企図の成否が、第一に「啓蒙の循環」の問題と「想像力」の問題のたんなる並立ではない、まさに両者の不可分性の提示にかかっていると期待しても差し支えないだろう。また第二に読者はさらに一步踏み込んで、本書が、両問題の不可分性だけでなく、「想像力」の問題を広くカント批判哲学全体においてに深めていくことにより、「啓蒙の循環」の問題が解決される、という関係に両問題が立っていることを示してくれると考えることになるだろう。

さて、まず「啓蒙の循環」である。本書に従えば、この問題は、たんにカントの一つの著作や一つの論文などに限定されるような局所的なものではない。著者の考えでは、この問題はカントの哲学の全体にまで及ぶ。「カントの批判哲学が一種の循環を示している[…]]」(「序論」)とさえ言われる。循環は、批判哲学にとり、周縁的問題どころではなく、中核的問題だということになる。「循環は啓蒙するの、啓蒙されるのわたしたち人間の理性であることに由来して」(「序論」)おり、それは「[…] わたしたちは自分たちの理性によって自分たちの理性を啓蒙する。だが、わたしたちが啓蒙されるべき未成熟な状態にあるならば、そもそも啓蒙する理性そのものをいまだに持ちあわせていないはずではないか」(「同」)と表現される。

この「啓蒙の循環」という問題と不可分とされるのが「想像力」の問題である。想像力が焦点となるのは、それが「中間的な存在者としての人間の」「中間的な能力」(「序論」)であるがためである。想像力の中間という性格、たとえば感性と知性の間の、あるいは感性と理性の間の、等々は、啓

蒙の循環の原因としての、人間の存在の中間的な性格、すなわち「神聖な理性的存在者でも、理性を持たない動物でもない、それらのあいだの「理性的動物(animal rationale)」として」(「同」)の人間、という性格と結びつく。著者は想像力を「啓蒙の[...]循環から脱却するための手がかり」と呼ぶ(「同」)。こうしたカントにおける想像力概念(さらに想像力概念一般)への着目の先行者としては、ヘルマン・メルヒェン、ハイデガー、カッシーラー、マックリール、ギボンズ、ギンスボルグ、ボイムラー、三木清、坂部恵らの名前が著者により挙げられるが、いずれも本書の企図を完全な形で先取りするものではない。特にカントの実践哲学における想像力、すなわち筆者が「実践的想像力」と呼ぶ問題への注目が不十分であったとされる。

ここで本書の構成と、各章の目的および内容について概観しておこう。

本書は「序論」に続き、大きく三部に分かれる。すなわち第Ⅰ部「想像力と理論理性」と第Ⅱ部「想像力と実践理性」、そして第Ⅲ部「想像力と『判断力批判』」である。この三部構成は、おおむねカントの批判哲学の中核部分を形成する三批判書の体制に対応するようにも見えるが、以下の第Ⅱ部でのカントの歴史哲学の焦点化などからも分かる通り、問いの構えは三批判書との形式的対応を超えるものである。つまり、実践哲学の範囲を、『道徳形而上学の基礎づけ』、『実践理性批判』、『道徳の形而上学』といった著作に限定せず、それをカントの歴史哲学的著作群に拡張し、強くその役割を強調するところに本書の独自性の一端がある。

第Ⅰ部「想像力と理論理性」は、第1章と第2章からなる。第1章「総合とは何か——「世界」の秩序をつくる」は、「超越論的演繹の構造」、「覚知と再生の総合」、「再認の総合」の各節を含む。焦点になるのは、『純粹理性批判』における想像力の役割とその「多層的構造」(同章)であり、特に『純粹理性批判』第一版演繹論のいわゆる「三重の総合」が分析を受ける。

第2章は「想像力と自己意識——「わたし」の意識をつくる」である。ここでは「批判哲学における「わたし」、「総合と自己意識」、「行為するわたしへ」という各節に分かれて議論が展開されている。この章では、想像力をめぐる議論から自己意識とは何であるのかを明らかにすることが試みられ、また合わせて理論理性と実践理性との関係における自己意識論の役割についても解明がなされる。

さて第Ⅱ部は「想像力と実践理性」であり、第3章と第4章を含む。

第3章は「自律の構想——実践哲学の目指すもの」である。本章は、「実践哲学の全体像」、「『基礎づけ』の議論構造」、「理念としての自律」の各節を含む。本章では、実践哲学の基礎づけが『道徳形而上学の基礎づけ』の論証を通じて検討される。本章は、「啓蒙の循環」を示すための準備的作業を行なっているという側面も強く持つ。すなわち、「実践的想像力」というものが、なぜ前面にでてこないのか、という問題を明らかにする。筆者は「自律の循環」という問題を立て、これを「啓蒙の循環」問題へと接続させる。

第4章は「想像力と歴史哲学——理性の発展を跡づける」と題される。本章は次の各節、すなわち「意志の自然素質」、「非社会的社交性」、「「実践的想像力」の可能性」からなる。本章の議論は、本書全体でも中核的なものを形成し、ここで大きな議論の方向性が決定づけられる。

第Ⅲ部は「想像力と『判断力批判』」である。ここには第5章と第6章が含まれる。

第5章は「美感的判断の構造——「想像力の自由」とは何か」である。この第5章は「合目的性概念の問題圏」、「反省と調和」、「想像力の自由」の各節からなる。この第5章、第6章は、第4章の感情の伝達の問題を引き継ぎつつ、それを補完する機能を持つ。想像力の概念の、カント歴史

哲学内部での到達点を踏まえうえて、著者はそれが感情の普遍的伝達可能性の問題として継続発展して議論される場所に『判断力批判』を選んでいる。第5章で美感的判断の基本的構造が確認された後、第6章「想像力と感情——啓蒙の原動力」では、「共通感覚の理念」、「感情の伝達」、「人間の能力としての想像力」という各節構成のもと、共通感覚、感情の普遍的伝達可能性といった問題が扱われる。

本書の特徴は以下である。第一に想像力と啓蒙という観点から、カントの哲学全体に一貫した見通しを与えようとする試みの独自性である。第二に想像力の役割をカントの実践哲学のなかで見出し、またその問題を、広い意味での自然目的論の文脈に位置づけつつ、歴史哲学と接続させようとする点である(特に第3章と第4章)。第三に非社会的社交性や共通感覚といった概念を、広い文脈で機能させようとしている点である。ともすれば、カントの各著作、各領域に別れがちな研究状況を踏まえれば、筆者のようにカントの著作全体を広く視野に収め、その思想を、一貫した視点から語り抜こうとする、本書のような大きな構えは尊重されるべきだろう。

本書について、若干疑問として残った点についても付言しておく。それはカントの歴史哲学関連小論の取り扱い、位置づけに関する疑問である。著者はオニールの「理性能力はその始原において(部分的にせよ)公的な討議に依拠することができない」、「いかなる討議も最小限の理性能力を前提とするからである」(序論、第3章)といった議論、またハーバーマスの「公衆のジレンマ」(序論、第3章)といった議論に依拠しつつ、「啓蒙の循環」という問題を立てる。その上で「この循環から脱却するための手がかりは、カントの歴史観にある」(第3章)と言い、『世界市民的見地における普遍史の理念』と『人間の歴史の憶測的始原』を取り上げ、「非社会的社交性」概念や「感情の伝達」概念などを評価する(第3章、第4章)。またこの文脈において『判断力批判』の「共通感覚」概念や「美感的判断」概念に光を当て、そして、こうした概念群に深く関わるものとして想像力を高く評価するわけである。

しかしこうした、想像力というものを軸として、実践理性の歴史的な発展を語り、そのことにより、「啓蒙の循環」と呼ぶものを解決する、という著者の議論の構えは本当に有効なものなのだろうか。狭義の批判哲学を形成するテキスト(ここで私は三批判書および『基礎づけ』を考えている)の重要な欠点・困難とされるもの(筆者の言葉で言えば「啓蒙の循環」であり「実践的想像力」の欠如)を、狭義の批判哲学を形成するテキスト以外のものによって補完する、という手続きは正当化できるものなのだろうか。筆者が「想像力」という概念を通じて、カントの諸著作を<繋いでいく>、その手続きがスムーズで、また見事であるだけに、カントがこだわっていた<分ける>ということの重要性が後景に退いているような印象を受ける。

もちろん筆者は、第3章の記述などを見ても明らかな通り、実践哲学の基礎づけが問われている場面と、そこで示された目標が実現に移される場面を、あくまでカントに即して切り分けている。また第6章の「想像力と感情」をめぐる議論においても、「共通感覚」の理念的な性格を見失っているわけではない。

しかしながら、第4章の「歴史の自然目的論」やそこで示される理性の発展という議論、さらには第6章で強く強調される共通感覚の「生成」という議論、さらには想像力を媒介とした理性の歴史的発展という筆者の全体的議論は、カントの議論が持っていた理念的な性格、統制的な性格を踏み越えている(少なくとも誘惑されている)ように映る。もちろん筆者はこうした批判に自覚的であり、いくつもの箇所です防線を巧みに張り巡らせているのだが。。。(なお筆者が自然目的論や歴

史の問題を強調するにも関わらず、『判断力批判』第二部の「目的論的判断力の批判」およびその「方法論」を、あまり正面から扱わないことについても疑問が生じる。同箇所であれば、議論は批判書の内部で進めることが可能であるのだが。。)

もっともこれらの疑問点は些細なものであるかもしれず、著者の次著以降の展開の中で解明されるのかもしれない。「カントの想像力の理論はその社会性においてヒュームやスミスを受け継ぎ、また歴史性においてデイルタイを準備する。本書では十分に論じることができなかったが、十八世紀から十九世紀に至る想像力の思想史からカントの批判哲学を再考することは今後の課題である」(結論)といった、著者が示唆する今後の魅力的な研究プランとともに、さらなる議論の展開に期待が高まる場所である。